

## 遠藤周作「楽天大将」論

— 朝吹志乃にうかがえるグレアム・グリーン二作品の影響 —

笛木美佳

一

遠藤文学に登場する女性を追っていると、一人だけ異質な人物に出会う。「楽天大将」<sup>(1)</sup>（昭43発表）の朝吹志乃である。

遠藤文学に描かれた女性は、「わたしが・棄てた・女」の森田ミツに代表される、多くは自己犠牲を伴いながら〈受けとめ、与える〉女性、もしくは「真昼の悪魔」の大河内葉子や「スキヤンダル」の成瀬万里子のように自身の心や周囲の人物の心境・状況の変化を〈求める〉女性に大別できる。この特徴は、固定しているわけではなく、例えば「女の一生 一部・キクの場合」のキクは、はじめは清吉の愛を〈求めて〉いたが、やがて清吉の苦しみを〈受けとめ、愛を〈与えて〉いく女性に変貌していく。「深い河」の成瀬美津子をはじめは〈求める〉女性であったが、やがて大津の言葉を〈受けとめ、次に受け継ぐ女性<sup>(2)</sup>〉となっていく。

朝吹志乃も一見すると、〈受けとめ、与える〉女性である。孤独な誘拐犯金山と行動を共にし、彼の苦しみを〈受けとめ、ひねくれて硬く強ばった心を開かせる。しかし彼女は、金山に誘拐事件の自首を勧め、復讐を思いとどまるよう〈説得する〉女性でもある。管見ながら、遠藤文学にお

いて〈説得する〉女性ほかに登場しない。

ここで「楽天大将」のあらすじを簡単にまとめおく。小説家を目指していた金山は、幼稚園児裕一を誘拐し、身代金を奪う。朝吹志乃は全国石油社長朝吹健一の次女で、修道女の準備訓練として裕一の幼稚園に勤めていたが、偶然に金山と遊んでいる裕一を見つけ、身代わりになり、金山の逃避行に同行することとなる。志乃は金山に再三自首するよう勧めるが、少年時代から妻の子として社会の辛酸をなめてきた彼は聞き入れない。が金山の、人を信じられない孤独を理解した志乃は、自らの神〈楽天王子〉の「（あの男について……おあげ。あなたがいなければ、彼は一人ぼっちになる）」〈逃避行〉という声に従い、金山と行動を共にし続け、〈楽天王子〉の話で金山にする。途中、立ち寄った病院で金山は白血病で余命一年と知り、妻だった母と自分を虐待した内山への復讐に急ぐが、内山の家で追ってきた刑事ともみ合いになり、拳銃の暴発により命を落とす。志乃は金山が人を信じていることができぬまま亡くなったと自分の非力を嘆くが、しばらくして、復讐直前に投函した金山の手紙が届いた。そこには志乃を「生まれからはじめて信用する一人の他人」〈泉〉であったと書かれていた。（作品には愛薄き裕一の物語——身勝手な俳優である父砂田英郎と、銀座でバーを

開いていて子育てをなのおざりにしている母朝子の物語——、志乃を思慕する雑誌記者今井の活躍も並行しているが、割愛する。

この志乃の行動は、「おバカさん」(昭34発表)のガストンを想起させる。兄一人に罪をなすりつけ、戦犯に仕立てた上官たちを恨み、復讐のために殺し屋となった遠藤と行動を共にし続け、殺人を命がけで止めるガストンの行動とよく似ている。では、志乃は「ガストンの女性版」なのか。

ガストンと志乃の間には大きな違いがある。それは、復讐者たちを神に繋いでいるか否かである。ガストンは、「どんな人間も疑うまい。信じよう。だまされても信じよう——これが日本で彼がやりとげようと思う仕事の1つ」(「東洋の隠者」)という決心をもって来日した。彼は「イエスに倣う」

人生を模索し、臆病で非力でも、殺し屋遠藤に寄り添い続ける。しかし殺し屋遠藤には、神に繋ぐ存在としてガストンが意識されているとは言えない。遠藤は復讐相手との闘争によって重体に陥った。気絶してから何十分ののち「青い空にむかって、一羽のシラサギが真白な羽をひろげながら、飛び去っていくのがうつろな目にうつった」が、「本当にこの目で見たようでもあり、幻覚か、夢であったような気も」(「しらさぎ」)したと話した。殺し屋遠藤が神を意識したか曖昧である。この話を聞いた日垣隆盛は、

(それでいいんだ。あの男は消えるべき人間なんだから……)／竹取物語の主人公のように空から来て空に戻った——隆盛は空想ではなく真実、ガストンの運命をそう考えるのである。(「しらさぎ」)

(ガストンは生きている。彼はまた青い遠い国から、この人間の悲しみを背負うためにノコノコやってくるだろう)(「しらさぎ」)

と、ガストンが超越的な存在であると気づいているが、それを殺し屋遠藤

をはじめ他者には話さないもので、キリスト教の神への思いは、「おバカさん」ではほぼガストン一個人において完結していると言える。

一方、志乃は「楽天王子」と名付けた自分の神を何度か金山に語り、その存在は金山の中で次第に大きくなっていく。最初に話したのは名古屋へ向かう汽車の中で、逃避行中、初めて金山の警戒心が緩んだ時であった。

「その人は……みんなに好かれて、みんなが好きで、みんなを信じて、みんなから信じられて、いつも楽しそうに笑って……みんなに倅せを与えようとして……あたし、そんな人にいつか会えないかなアと、いつも思っていたのよ。名前もつけてあげたの。楽天王子って」(「逃避行」)

しかしこの時の金山は、「子供の時から俺は……人間なんか信じられん、と骨のズイまでわかっていたのさ」と受け入れず、「まるで無邪気な子供を馬鹿にするように笑」う。志乃が「この世のなかには他人のために一生をささげている人が沢山いるわ。それでも他人が信じられないの」と食い下がっても「そんなものは当人の虚栄心」、「でなければ、エゴイズムさ。自分がいい事をやっている。立派な行為をしているという自己満足だね」、「あなたの楽天……楽天大将だって同じことだろ」(「逃避行」)と言って、撥ねつける。

しかし金山は志乃の言葉を心にとめていた。彼は名古屋で志乃の隙を見て行方をくらませた後、以前軽井沢の医師から首のグリグリは癌だと告げられたことを思い出し、「吐き気のように急に胸をつきあげてくる」「死の不安」(「逃避行」)と闘う。

不安はまるで疲労のようにいつも彼の体にまつわりついていた。あるいは疲

勞と不安とが一緒になって金山の胸ふかく拡がっていた。／（楽天大将か……）／なぜ、こんな時、昨日汽車のなかで志乃が金色の空をみながら、しゃべった話が心に甦ってくるのだろう。（逃避行）

その後名古屋の医師から、曖昧な言い方ながら白血病の疑いがあり、精密検査と治療のために入院が必要であるほど重篤であることを告げられた金山は復讐を急ぐ。その金山を志乃は探しあて、再び同行し、広島で専門医に診察してもらおうことを提案する。

二回目に志乃が〈楽天王子〉について語ったのは金山の依頼によるものだった。広島の中の喫茶店で、コーヒーを飲んでいる時、「おい。いつか、あなたの話をしていた楽天大将のこと、もう一度しゃべってほしいか」と頼まれ、志乃は「楽天大将は、いつも笑っていて」、「みんなは彼のことが好きだし、彼もみんなが好き」であること、「困った時があっても、彼のところに相談にいく」と「彼はまるでそれが自分の哀しみのように親身になって話をき」いてくれ、「彼に会えば誰だって、この世のなかには苦労だけがあるのではなく、自分の幸福をねがってくれている人が沢山いるような気が」（斜面）して、心穏やかになると話す。その間、金山は、じっと話に聞き入る。

頬骨の出た孤独な顔の眼をつむり、金山はじっとその話をきいていた。／そう——／この男が眼をつむって聞いていた。楽天大将の話を。ちょうど、長い間、渴えていた者が雨の水をむさぼり飲むような表情で、志乃の語る話に耳を傾けていた。（斜面）

志乃がこの空想にふけたのは「十四歳ぐらいの頃」と聞いた金山は、

自分の「十四歳の時の口惜しい、みじめな幾つかの思い出」に「胸を茨のように刺」されて「また血をにじませ」る結果となったが、「決して胸襟を開こうとしなかった」今までは異なり、志乃に「真面目に自分のことを言おうとし」（斜面）たのである。ここに金山の変化がうかがえる。

この〈楽天王子〉を語った体験は、志乃にも大きな意味を与えた。「修道女の卵」でありながら若い男に同行し、「世間の人から見れば、まるで情婦のような行動」だが、「一人の人間が、他の人間を信じること」が「今の世の中ではほとんど不可能にちか」く、「金山もそうした世界の一人」だからこそ、彼の「心に、たった一握りの根でもいい、もう一度、信ずるということがどんなに意味があるかを知ってもらいた」（斜面）いと決意を新たにし、折に触れて彼に語りかけ続けるのである。

その後金山は、「あと一年もたたぬうちに死ぬ」という広島の特設専門医からの「暗示」（斜面）を持って、志乃の元に戻って来た。「今朝、志乃の語る楽天大将の話を、まるで母親の乳房を吸う赤ん坊のように、眼をつむり、むさぼるように聞いていた金山の姿はもうどこにもなく、同行を続けようとする志乃に「帰れ。いい加減にしてくれ。これ以上、あなたの慈善につきあっているのは、ごめんだ」と突き放す。が、その一方で「まるで裏切られた少年のように涙をながしていた」（斜面）。この志乃の元に戻ってきた金山の行動には留意すべきである。なぜなら彼は名古屋で隙を見て姿をくりました時と同様、傷心を抱えつつ、ひとり復讐に向かってよかったからである。彼が戻ってきて無防備に「涙をながし」、誰にも明かさなかった心の奥を見せていることから、金山にとって志乃がまるで苦しみを受け止める母のように心の支えになりつつあることがうかがえる。三度目に志乃が〈楽天王子〉について語ったのは長崎においてであった。

広島以後も志乃は金山に同行するが、迷いがなかったわけではなく、〈楽天王子〉の言葉「(ついで行きなさい)」「(他に、支える友だちがこの男にはいないのだし……)」「(斜面)」を耳にし、信念を貫き続ける。復讐の前日、金山から「俺みたいな男はもう放つときな。あんたは俺なんかとは境遇もちがう。生き方もちがう。あんたの言葉はどうしても俺の心に食い入ってこないんだ。別の世界の話を書いているような気がするんだ」と言われ「大きな打撃」(「追跡」)を受け、さらに若い娘としての限界も感じ、たじろぐその時も「(行っておやり)」「(前略)彼は飢えている。水をほしがる旅人のように飢えている)」「(愛)」と〈楽天大将〉は囁く。なおも「俺にだかれることができるか」という金山の言葉に「愛の限界」を知り、ひるむが、志乃は「それで……あなたの心がやさしくなってくれるなら、神さまだってわかってくださる筈だわ」(「愛」と、「修道女になる希望を棄て」(「泉」)の覚悟で金山と同室で過ごす。この時、志乃が〈楽天王子〉の導きによることを明かすと、金山は「あの大將のこと言うな」と「閉口した顔」(「愛」)を見せている。「王子」から「大將」に言い替え、「あの大將」(傍点引用者)と言っている点、金山の心に志乃の〈楽天王子〉が〈楽天大将〉として根づいていると言える。

「金山は遂に志乃に指一本ふれ」(「愛」)ることなく、志乃には告げず一人で内山の復讐に向かい、拳銃の暴発によって命を落とした。志乃は金山の「心は遂に固く閉じたまま開かず、「彼をすべての人々が見棄てても、決して見棄てぬ一人の友だちがこの世にいることをみせたかった」という願いも行為も「すべてが、無駄だった」(「泉」)と考えた。しかしその後届いた復讐直前に投函された金山の手紙には、今までの感謝に加え、

あんたは俺に色々なことを言ったが、俺はやはり、そうは思えない。あんたの言うような気にはなれない。／しかし、こうしてあんたに手紙を書いている自分もふしぎだ。手紙を書く以上、俺はあんただけは信用していることになる。生まれてからはじめて信用する一人の他人をもったことになる。(「泉」)と書かれていた。金山は自首は拒んだが、志乃のことは信じた。三度にわたる〈楽天王子〉の話は〈楽天大将〉として彼の心に残った。つまり、志乃を信じることを通じて、金山は〈楽天大将〉と繋がりが得たのである。以上、登場人物を神に繋ぐ観点からすると、志乃は〈ガストンの女性版〉以上の役割を担っていると言えるのである。

## 二

「楽天大将」の志乃——〈説得〉し、他人を信じられない男を神に繋ぐ女性は、どのように造形されたのであろうか。〈追われる男と同行する女の物語〉という構図に着目すると、遠藤が愛読していたグレアム・グリーン作品が想起される。以下、その影響の可能性を探っていく。遠藤は、『カトリック作家の問題』の「憐憫の罪 グレアム・グリーン」(事件の核心)<sup>(5)</sup>にその手がかりを残している。

他のカトリック作家と同じようにグレアム・グリーンの小説にも、二つの女性の型が描かれています。男性を悪に誘う、エバ的な女性と、逆に、男性の悪を鎮め、その弱さ、卑劣さを転じて、崇高なものへと導く、聖母マリア的な女性とです。この後者の聖母的な女性はグリーンの小説にあってはほとんど、貧しい、単純な、そして、つましやかな娘なのです。例えば『拳銃売ります』

A Gun for Sale 1936 のアンヌとか『内なる人』The Man Within 1929 の H

リザベスは、所謂、グリーンの好んで描く人間社会から、法律から警察から「追いつめられ」ているみにくく、陋劣な男たちの悲しみ、苦悩を理解してやる唯一人の存在です。彼女たちの生の軸をなすもの一つは、不幸なものへの憐憫であり、この憐憫の泪によって、「頑なにいじけた男たちの心情もいつか、濡れほごされていくのです。

この手がかりを元に「内なる私」と「拳銃売ります」に絞って考察する。<sup>(6)</sup>  
「内なる私」<sup>(7)</sup>のエリザベスは、作品において二つの役割を果たしている。第一に話を聞き、〈説得する〉役割である。彼女はたまたま家に逃げ込んできたアンドルーズを、彼を追ってきた仲間カーリオンからかくまう。アンドルーズは密告によって密輸団仲間を裏切って逃走したのである。彼女は、臆病なアンドルーズの不幸な生い立ちと、「今度こそ、ぼくだって大きなことができることを示してやったんだ」<sup>(一一五)</sup>と心情を吐露するのを聞き、

「あなたは、法律の味方をしてしまったんでしょ。だったら、あくまでも、それを押し通したら。法廷に出て、逮捕された人たちの犯行を証言しなさい。密告者になる道をえらんだのだから、正々堂々とした密告者になったらどうなの」<sup>(一一五)</sup>

と提案する。そして逡巡するアンドルーズに対して、「危険だからこそ、やりなさいよ」、「巡回裁判に出廷して、証言台に立てば、あの人たちより勇気があるということを証明できるわ」、「あなたは、いつもためらってばかりいるのよ。ためらってばかりいると、身の破滅よ。眼をつぶって、ひと思いに飛びこんでごらんさい」<sup>(一一五)</sup>と〈説得〉する。

彼女は、言葉で〈説得〉しただけではなく、彼をかくまう際には危険も冒した。追っ手のカーリオンは、二つ残った茶碗の一方を手にして、その温かさにはアンドルーズがまだ近くにいることを疑うのだが、エリザベスは「あなたが持っているのは、わたしの茶碗よ」と言って、「アンドルーズの飲み残しを飲みほし」<sup>(二一四)</sup>、救ったのである。この時、隣室に隠れていたアンドルーズは「彼女はためらうことなく、彼の唇に触れ、彼女自身の唇を汚した」と考え、その行為に「慈悲心と勇氣」だけではなく、「ひねくれた彼の心には、驚くほど高潔なもの」を見て、「彼女は聖者だ」<sup>(二一四)</sup>と考えていく。自分の信念に基づいた行動を迷うことなく遂行する彼女の姿勢は、臆病な彼に畏敬を抱かせ、行動による〈説得〉<sup>(8)</sup>となっているのである。

第二にエリザベスは、アンドルーズに勇気を与え、自信を持たせる存在でもある。裁判で証言台に立った彼は「誇らしげに、ひとりの女性の名前を旗のようにかかげ」、「おれは勝ってみせる」、「そうすれば、彼女が褒めてくれるはずだ」<sup>(二一八)</sup>と、エリザベスを心の支えにしていた。裁判には負け、密告された仲間はアンドルーズへの復讐のため、彼をかくまったエリザベスも狙う。それを知りながら、恐怖のために躊躇し、すぐには助けに戻らなかったアンドルーズを彼女は受け入れ、危険を知らせに戻ってくれたことに感謝し、証言台に立ったことを「よくやったわ」<sup>(三十一)</sup>と褒め、臆病な彼の苦悩と努力を理解し、自信を持たせる。

さらにエリザベスはアンドルーズの分裂した自己を統一する可能性を示す存在でもあった。アンドルーズは臆病な性格のあまり、事ある毎に現実から眼を背け、空想の世界に逃げ込む男であった。「感傷的で、威張りたがり、ものを欲しがる子供のような自分と、それをきびしく批判したがる

もうひとりの自分」の「ふたりの自分」(一一二)に分裂していて、深刻な悩みとなっていた。が、彼の生い立ちを聞いた「彼女はその眼の奥に、時たまちらっと垣間見させてくれたにすぎないにせよ、彼の中にいる二人の自分が一人に統一される可能性を、秘めてくれているように思われた。そこには、彼がときに音楽の中に見出した心の平和も秘められているように思われた」(二一五)のである。

この統一はアンドルーズが現実に対峙し、空想に逃げ込むことなく物事を自ら決断しなければ得られない。裁判後、迫る危険を前に恐怖を訴え、すぐにも二人で逃げようと提案する彼にエリザベスは反対する。そして「臆病」だとも「それを恥ずかしいとも思わない」と言う彼に「そんな考え、忘れてしまいなさい」、「わたしは行かないわ」と言った後、「押し黙って、彼に自分で決心するよう迫」(三二一)る。アンドルーズの空想癖を非難する内なる批評家も「この日にかぎって、沈黙を守り、傍観して、「自分で重大な決心をする時だぞ。おれは干渉しないぜ」と言っているように思えた」(三二一)とある。つまりエリザベスは彼の内なる批評家同様、臆病な心に左右されぬ冷静な判断、精神的な成長を促す存在なのである。

二人の自分の統一がなされたのは、彼に代わってエリザベスが犠牲となり自殺に追い込まれた後である。恐怖を克服し駆けつけたものの遅きに失し、死んだエリザベスを前に彼は、自分の問題の根源に気づき、初めて自らの意志による行動をとる。その時彼は「きつとうまくやりとげてみせるよ」と「生れて初めて口にする、誇りにみちた言葉」をエリザベスの「耳にささやきかけずにはいられなかった」(三二二)のである。エリザベスはアンドルーズにとって「この上なく神聖」(三二二)、かつ臆病な彼を理解し、精神的な成長を促す、母のような存在と言える。宮野祥子氏は

「Graham Greene 研究 *The Man Within* 論」<sup>(9)</sup>において「母に何もかも話したい」「何もかも知ってほしいという願い」に応ずるかの様に「Elizabethの身振りは彼の恐怖や惨さや逃げまどう身心を〈enclose〉してくれるかのような理解と慰めを表わしている」、「母性のイメージである」と述べているが、加えて新しい世界に誘い、巣立ちを促す母鳥のような役割も果たしていると言えよう。「楽天大将」の志乃も、広島で母のように金山の「泪」を受けとめたのみならず、金山に母そのものを思い出させる人物である。体調が悪化し、金山は志乃の「オーデコロン」の匂いが染みこんだハンカチで介抱を受ける。

金山はむさぼるようにハンカチの匂いをかいでいた。／「むかし——俺のお袋も、こんな匂いをハンカチにしみこませていた」／「そお」／「もっとも俺のお袋はよ、あんたとちがって自分の体を売らねば仕方のない女だったがね」(斜面)

金山の母への強い思慕が現れており、孤独で殺伐とした世界に生きている彼に、志乃の〈愛〉の世界が入り込む隙間を示している。そして、志乃に心を開き、辛い過去を語り始める金山には、「内なる私」のアンドルーズの姿が重なる。

第三にエリザベスは、神を忘れていた彼に信仰を思い出させ、神に祈ることの意味を考えさせる役割を担っている。

アンドルーズはエリザベスから「あんたはいつも神様を無視してるようだよ」と言われた時に「ぼくはそんな下らないものは信じない」(二一四)と答えていた。しかし、彼は知らず知らずのうちに祈る人になっていく。

裁判の朝「祈るなんて、何年ぶりかのことだった」が、「ベッドのわき

にひざまずいて、「ああ、神様、あなたが神であるのなら、勇気を与えて下さい」と「やみくもに心から祈」(二一八)り、エリザベスの家に戻ってからも「ここ二十四時間の間にこれが二度目であり、ここ三年の間でもこれが二度目」(二一九)という祈りを捧げる。エリザベスが「神さまに對する信仰」(二一十)を曲げなかったため、自分の思い通りにならなかった時は「神様が何をしてくれたっていうんだい？」と不満をぶつけたがエリザベスの「こうして生きてる」ことへの感謝や、神の教えに照らして「正しいと思うことをする」(三一十)という素直な信仰を目の当たりにすることで、神への祈りも変化していく。物語の終盤、自殺したエリザベスに對面した彼は「神を信じることの意味と可能性をおしえてくれた一つの生命が、完全に破壊されたという事実の前では、憎悪など児童にひとしいものとしか思えな」くなり、自分の問題の根源に向き合う。その過程でエリザベスの「自分の命を犠牲にするまで」の「はげしい恐怖と幻滅」を思いやり、彼の帰着を「最後の最後の瞬間まで、希望を持ちつづけて」待っていたであろうと思うに至った。このエリザベスの信頼は「かすかな希望」として彼に伝わり、「彼の心に信仰が芽生えたしるしかもしれない」(三一十二)と描写されている。

岩崎正也氏は『内なる人』——グレーム・グリーン「喪失」と「成熟」<sup>(10)</sup>——で、グリーン作品の「追う」と「追われる」の關係について「人と人との間の水平的關係での對立であるとともに神と人との間の垂直的關係での對決でもあるという二重構造をもつ」とし、「アンドルーズは、彼女の死の行為の中に、赦しと憐れみを烈しく感じとったからこそ、死の恐怖を克服し、エリザベスの信じた神の存在に収斂される可能性を見出したに違いない。物語の結末で神の出現を予感させた『内なる人』は、アンドル

ーズが「追われる」から何かを追い、捉えるものへと転化するることによって、水平基軸が垂直基軸へと回転を始めたことを示唆している」と述べている。蓋し卓見である。エリザベスは、「水平」の關係のみで生きてきたアンドルーズに、「垂直」の關係を実感させる女性なのである。

以上のように、〈説得する〉女性であり、男性の心に寄り添い、新たな世界に連れ出す女性である点、エリザベスと志乃は重なっている。信仰の面でも志乃が人間同士の「水平」の關係しか知らなかった金山に「垂直」の世界を示した点で重なる。ただし、その方法はエリザベスとは異なる。

先の引用に見えるようにアンドルーズは「音楽の中に」「心の平和」(一一五)を見出す男である。エリザベスは、「音楽のような声」(一一四)を持ち、その言葉はアンドルーズに「心の平和」をもたらす「音楽」として自然に届くのである。また、彼女は聞く人である。カーリオンもアンドルーズも「話を聞かせて」(一一四)「聞かせてよ」(一一五)と言われて、子供が母にすべてを無防備に打ち明けるように、心の奥まで語っている。

しかし、志乃は聞く人ではなく、語る人である。アンドルーズが「音楽」としてエリザベスを受け入れていったとは異なり、自ら語らなければ、他人に心を閉ざし、他人を信じようとしめない金山には声は届かないからである。さらに、信仰のあるイギリスと、信仰のうすい日本の違いもある。遠藤は「私の文学 自分の場合」<sup>(11)</sup>に、次のように記している。

私はカトリックでありながら小説家である西洋の作家——たとえばモーリヤックやジュリアン・グリーンやグレーム・グリーンをたえず読みかえしながら、いつも自分と彼等とのちがいを考えざるをえなかった。(中略) 彼等は私が問題にせねばならなかったようなことをそれほど考えなくてもよかった

のである。彼等は一步外に出れば大教会のある町をもち、その周囲には彼と同じ信仰と同じ基督教感覚をもつ人々にすぐ出会うことができる。いわば彼等は読者と共通の場をもつことができる。

信仰を持たない金山にも死の不安を慰め、支える存在は必要である。しかし日本では、支える存在としてキリスト教の神に一直線に繋ぐことは難しい。物語の中にも違和感が生じ、読者にも敬遠されるからである。したがって、修道女の志乃の言葉に耳を傾け、志乃を信じることを通して、〈楽天大将〉という名の神に繋がる仕組みを遠藤は設定したのではないだろうか。

さて、このような信じる行為と、言葉を尽くして語りかけ、頑なな心を和らげる女性という点に着目すると、同じグレアム・グリーンの「拳銃売ります」<sup>(12)</sup>の影響が見えてくる。

「拳銃売ります」のアンは、レイヴンに他人を信じること、信仰の大切さを伝える女性である。レイヴンは兎口で、「母親は父親が監獄にいる間に彼を産んだ、そして六年後、父が別の犯罪で絞首刑にされた時、母は台所包丁で自分の咽喉をかき切った。その後は保護院<sup>ホム</sup>だった。彼は今まで他人にわずかなやさしささえ感じたことがなかった」(二―五)という経歴の持ち主である。偏見に晒され、裏切りを受け続けた彼は、殺し屋として闇に生きる男となっていた。

彼がアンと行動を共にすることになったのは、殺人を犯して逃亡中に切符の交換を頼むため、偶然近くにいたアンに声をかけたからであった。けれども、アンの言動はレイヴンの意表を突くことばかりであった。アンはサンドイッチをおごるといふレイヴンに「自然な親しさ」や「無鉄砲で夢

中な嬉しがりよう」(二―三)を見せたのみならず、「人殺し」(二―三)に無理矢理連れて行かれると知っても、「あんたの顔のなながいけないの?」、「あんたは、醜くないわ。あんたは女の人を持つべきだわ。彼女はあんたの、そんな唇のことなんか、心配しないようにしてくれるわ」、「あんたはそんなに悪人じゃないわ。こんな会いかたをしなかったら、友達になってたかも知れないわ」(二―三)と繰り返して語りかける。頭のいい彼女には「幾らかでも親しくなった人間を殺すのは、そうでない人間を殺すのよりむしろかしいのに違いない」(二―三)という計算もあったのだが、レイヴンの心には強く響いた。「あの女は、彼の醜さを神様みたいに気にしなかったわけ。あたしの名はアンよ。あんた醜くないわ。あの女は、おれがほんとは殺す気だったなんて、知らなかったんだ。(中略)そして彼は驚きに打たれた——あの女はおれを裏切らなかった。警察がおれを追ってると話したのに! 彼女はおれを信じた、とまで言いきれそうに思える」(二―五)と回想している。

その後もアンの語りかけは繰り返される。彼女は、戦時体制内閣の大臣が殺された(レイヴンが殺しを頼まれ、事情をよく知らずに殺害してしまった)ことにより、ヨーロッパに戦争が起りかけていると知り、それをとめるために、レイヴンに黒幕の人物を探し出し殺害するという目標を共有させ、実行を促す。その間、「あたしあんたの味方よ」(四―一)と言い、親近感を覚えたレイヴンが自分の兎唇を目の前で見せても、「あんたは普通の人よ」「あたし、あなたが好きよ」「あたしを信じて大丈夫よ」「あたしたちは友達でしょ」(五―一)と語り続ける。「今までの人生において信じている人間はただのひとりもいなかった」孤独なレイヴンは彼女を信頼し、過去に犯した何件もの殺人を語り始める。それは二人の信頼関係の「最初の垣」で、

もし彼女がそれをきいても驚かなければ彼は「垣」を越え、「自信をえられる」(五―1)と思つたからである。しかし、アンは正義感が強く、その「最初の垣」を「越え」させることはなかった。彼女は「あんたを見捨ててゆきやしないわ」(五―1)と答えるものの、「嫌悪」を覚え、「不意に、今までは全く醜いとも思わなかった彼の唇」が「心に浮」び、「思っただけでも吐き気が出そうにな」る。そして「彼は野獣でしかない。注意深く扱って終いに殺さねばならぬ生きもの」(五―2)と考え、最後に彼を裏切る。アンの気持ちの変化を知らぬレイヴンは「何から何まで誰かを信じられるなんて、いい気持だぜ」(五―1)と言い、彼女の目標通りに黒幕のマークス卿を殺害し、アンの婚約者マザー刑事の部下に射殺された。マークス卿殺害時にアンの裏切りを知らされたレイヴンは、「ただ痛みと絶望だけを自覚していた。それは他の何物よりも、全くの疲労に似ていた」(七―2)と描かれるが、彼は「絶望」のみを抱いて死んだのではなかった。

いまはじめて、自殺した母親のことが彼の心に、憤りを伴わずに浮んできて、彼が長い気の進まぬ結末をつける標準を定めたとき、背後の開いたドアからソーンダーズが彼を射った。死は耐えがたい苦痛をともなってきた。女が子供を産み落すように、彼はこの苦痛を産み落さねばならぬらしかつた。彼はそうしようとむせび泣き、呻いた。ついにそれは彼から産まれ、離れ落ちた。そして彼はこの産み落した苦痛、彼の産んだただ一人の我が子の後を追って無限の闇の中へおちていった。(七―2)

ここには、母という他者への共感が表れている。裏切られ続けた彼が、決して裏切らない死に出会い、「耐えがたい苦痛」を味わうことで、母の苦しみを理解し、喪失していた母を再び取り戻したのである。この母への理

解は、アンへの信頼によって導かれた、他者への関心がなければ生まれ得ないものであつたらう。

さらに、この決して裏切らないものを得る直前、彼の頭をよぎったのは、次の言葉であつた。

「ああ、キリストよ、かかることがありうるのですか」だが、彼は生れた時からこの最後を刻印されていたのだ、次々と誰も彼もに裏切られ、ついに生命へのどの道もびったり閉ざれてしまうように、なつていったのだ——(七―2)

この神に語りかけることもアンが教えたものであつた。もともと彼にとつて、キリスト教は保護院ホムで強制されたもので、聖書の知識があることは、「おれは教育があるだろ」(一―3)と誇示するためのものではしかなかった。一方のアンは、「運命」とか、「神」、「悪徳」、「美德」を信じ、また、既の中のキリストを、そしてすべてのクリスマスの話を信じていた。邂逅めぐりあひをととのえ、ひとを盲目の情熱に駆る目に見えない力を信じていた(二―4)。逃亡中に小屋の中で語り明かした時も彼女はレイヴンに「洗礼名」(五―1)を尋ね、眠りに落ちた彼がふと目覚めた時に問うと「あたしちょっとお祈りしてたの」(五―1)と答える。「君は神を信じるのか」との問いかけに対しては、「わからないわ」「時にはね。習慣みたいなものよ——祈るのって。別に害はないわ。ちょうど梯子の下を通るとき、おまじないに指を組み合せるわね、あんなようなものよ。誰だつていい運がくれば嬉しいじゃないの」(五―1)と答える。

彼女にとつて、祈りは大げさなものではなく、ごく身近なところで信じ、心を委ねるものであつた。それゆえ、彼が知識の誇示に用いる「おれたち

は保護院<sup>ホシム</sup>じゃあずいぶんお祈りをやったぜ。一日に二回、それに食事の前にもな」という形式にすぎない祈りに対しては、「そんなことは別に何の意味もないわ」(五―一)と否定する。この彼女の祈りの姿は彼の心に焼き付き、後にマールカス卿殺害の場面でも思い出している。最後の「ああ、キリストよ、かかることがありうるのですか」というレイヴンの語りかけは、アンによって繋がれた神への、形式を超えた心からの信仰を表しているのではないか。すべて運命として受け入れ、「おまえが入ってきたときよりもいかに品よくさっぱりと、人生から出てゆくことか」(七―二)に意識を向けたとき、決して裏切らない死と、母への共感と、神への信仰を彼は手に入れたのである。

「拳銃売ります」において、たとえ策略の一環であったにしろアンの言葉にレイヴンが動かされ、他者を信じることをきっかけに心が開かれ、真の神に繋がっていったこと、「水平基軸」から「垂直基軸」に転換していったことは、「内なる私」の場合よりも鮮やかに印象に残る。この仕組みを「楽天大将」は取り込んでいないだろうか。

以上、「楽天大将」は「内なる私」「拳銃売ります」の両作品の影響を受けており、志乃の人物造形にエリザベスとアンの人物像が流れ込んでいると推察できるのである。<sup>(13)</sup>

### 三

最後に二つの問題について考察する。

問題の一つ目、なぜ遠藤はこの時期に志乃のような女性——行動を共にし続け、〈説得〉し、信じることを通して神に繋ぐ女性を描いたのか。

「楽天大将」発表前後の遠藤の主な作品を整理すると、昭和四十一年三

月『沈黙』刊行、昭和四十二年一月「父の宗教・母の宗教」発表、昭和四十三年一月「影法師」発表、昭和四十三年七月～四十四年二月「楽天大将」連載、昭和四十四年六月「現代日本文学に対する私の不満」発表となる。これらはいずれも母の宗教を求める日本人の宗教観に言及し、同伴者イエスについて描いた作品である。特に「現代日本文学に対する私の不満」では、現代文学は心理探究のみ描いていて「魂の探究」を忘れ、「存在の渴望を無視して」おり、「人間と人間や人間と社会の関係」のみで、「人間とそれを超えたものの関係と相剋」を描いた「劇」がないという不満を述べている。「楽天大将」はそれを補うような構図が設定されているのではないか。

さらに後に『イエスの生涯』としてまとめられていく「聖書物語」の並行連載も重要である。「聖書物語」は新潮社発行の「波」に昭和四十三年五月から三十七回にわたって連載されたエッセイである。そのうち、「楽天大将」の連載時期と前後して重なるのが以下の六回である。(1973/6月号)に掲載された「最終回」に「\*この連載は、訂正、加筆の後に「イエスの生涯」(一小説家の見たる)と題して新潮社より出版の予定である——著者と付記されたように、現行の『イエスの生涯』とは構成自体にも大きな変更がなされているので、本論と関わる部分を簡単にまとめる(ルビは省略する)。

「はじめに」(1968/春季号、昭43・5・1)

聖書を文学的観点から読むと、そこには「近代芸術や近代文学がすっかり忘れた芸術の本質——劇——がある」。この劇とは「人間的なものと人間を越えたものとの闘いか調和」である。

「(その二) 生誕」(1968/夏季号、昭43・7・1)

幼い子供が眠りにつく前、枕元で母親がイエス生誕の話をしながら「大きく  
なったら、お前もその人に会えるでしょう」と言う。やがて子供に「その人と  
会、うことは遠い昔の物語だけでないことがわかる日がくる。母親が埋めておい  
た小さな埋れ火の火が生きかえる。はじめて彼は知る。クリスマスとは十二月  
二十五日のことではなかったと。それは彼が、その人をふたたび考えた日のこ  
となのだと。その人が生れたベトレヘムのうまごやはふるい遠い国の場所のこ  
とではなく、自分の心の奥のことだったと」。

〔その三〕 日本人と聖書（1968／秋季号、昭43・10・1）

「キリスト教は父性的なものと母性的なものとを二つそなえた宗教」だが、「日  
本人は元来、父性的な宗教は苦手」で、「日本人の宗教心理のなかで、最も大き  
な特徴は、何よりも母親のイメージを超越者に与えることであり、美的なもの  
でなくてはならぬという二点」だ。

〔その四〕 荒野の誘惑（1969／新春号、昭44・1・1）

荒野でのキリストとサタンの対決場面について、「この対決の問答ほど、人間  
の救いというテーマの核心をついたものはなく、悪魔の誘惑は「地上の救い  
と天上の救いとは人間にとってどちらが意味があるのか、地上の悲惨を天上の  
救いの名の下に眼をつぶってよいのか」「その地上の悲惨さに神はいつも手をこ  
まぬき、沈黙を守っているではないか」との三つに要約できる。

〔その五〕 キリストと義の教師（エッセネ派について）（1969／春季号、  
昭44・4・1）

「荒野でのキリストの孤独な生活にこそ、その人生における秘密がかくされて  
いると言えないであろうか。少なくとも、ここでの生活に後に、キリスト教の  
母胎となる何ものが育まれたのではないだろうか」。

〔その六〕 クムラン教団（1969／7・8号、昭44・7・1）

キリストを通して「地上天国の樹立」を「夢みた」クムラン教団の思想に対  
して、「愛の宗教」を重視し、「孤独」ともに対決しなければならなかったキ  
リストの闘いが「荒野での誘惑」なのではないか。

以上、「楽天大将」と並行して連載していた回は、遠藤が追究し続けて  
きた同伴者イエスのいちばん大切な根の部分——「その人」との出会いや、  
日本人にとっての「その人」の意味、イエスの生涯における重要な転機と  
なった「愛の宗教」を貫く方向性が書かれていたのである。この「聖書物  
語」の要点をより噛み砕いた形で示したのが「楽天大将」ではないだろう  
か。

例えば、「（その二）生誕」の「その人」との出会い、志乃の語った〈楽  
天王子〉の物語と、金山に受け入れられた〈楽天大将〉との関係に響き合  
っている。また、「（その三）日本人と聖書」に描かれている母性的なキリ  
スト像は、志乃が空想し金山に話した、身近で親しみ深い〈楽天王子〉像  
と重なっている。遠藤は「楽天大将」の「作者のことは」<sup>(14)</sup>において、「人  
間不信の時代です。他人が信じられないだけでなく、自分までなかなか  
信じられなくなります。今度の小説では、そのような人間不信の気持ちをは  
ねとばすような楽しい主人公を描いてみたいと思います」と書いた。こ  
の作品の主人公は一見すると志乃であるが、タイトルが示すとおり、志乃  
が空想した身近で親しみ深い〈楽天王子〉、そして金山が会った「その人」  
〈楽天大将〉こそが真の主人公であり、志乃は遠藤の創作意図を反映した  
人物として金山に、そして読者に語りかける女性なのである。

さらに、「（その四）荒野の誘惑」の「キリストとサタンの対決」は、金  
山が志乃に突きつけるこの世の不条理の話と重なっている。金山は、手も

足もない赤ん坊が「三カ月の間、なんのためにこの世界に生まれて何のためにヒイヒイ泣いて死んだんだね。可哀相に何の罪もねえ赤ん坊にこんな無意味な苦しみを与える奴がいたとしたら、あんた、どうする」、「神さまがいるなら、なぜ、こんなひどいことを赤ん坊にするんだ。え、答えてみな。それでもあんた、神さまとやらを信じるのかよ」と「勝ちほこったように」詰問するが、志乃は「それだから信じるわ」（「寂しき逃亡」と答えているのである。「聖書物語」と「楽天大将」は重なり合い、志乃は遠藤の意図を託された語り部として登場したのである。

続いて問題の二つ目、遠藤はなぜ〈説得する〉女性を志乃の後には書かなかったのか、なぜこの重要な役を担う女性が志乃だけなのか。

神を示し、その存在を無理なく繋ぎ得る人物は、グレアム・グリーンの場合、若い孤独な独身女性（エリザベス）でも芸人（アン）でもよかった。キリスト教の土壌があるからである。しかし、日本ではそうはいかない。それゆえ、志乃は修道女として設定されたと考えられる。けれども、いつも作品に修道女を登場させるわけにはいかないであろうし、同伴者イエスを読者により自然な形で想起させるには、繋ぐ役は男性の方が適しているのではないか。ここにガストンの復活がある。昭和五十一年一月から連載された「死なない方法」<sup>(15)</sup>に、『おバカさん』（昭33・4刊行）以来、約十八年ぶりにガストンが登場するのである。連載を終えた「楽天大将」が昭和四十四年十二月に講談社から刊行された約六年後である。

ここで登場したガストンは、「おバカさん」のガストンの容姿や、不器用で臆病な性格、弱者や悲しむ人に寄り添う性格を受け継いでいる。彼は勝呂医師に、「先生は……友だち、ない。だから、わたくし、いつも先生のそばにいますです」（Ⅶ）と寄り添って悲しみを分かち合おうとする。

また、彼は頻繁に神（イエス）に語りかけ、イエス（神）も傍線で示したように近いところから彼に語りかけている。

神さま。あなたの創ったこの世界はあまりに悲しみが多すぎる。あの老人はもうすぐ死ぬというのに、孫娘のために祭りの着物を買ってやりたいと言っています。その着物をあの老人にやってください。／（さあ、その着物のお金をつくるために）／とガストンは誰かがやさしく、肩に手をおいて囁くのを聞いた。／（お前はあの日本人とボクシングをやらねばならないよ）／（それ、困る）とガストンは頭を強くふった。（それ、痛い）／（痛いから、行くんだよ）／その人はガストンに言った。／（わたしも痛かったんだから。手と足とに釘をうたれた時は……）（Ⅴ 傍線引用者）

ここには、「楽天大将」において志乃が〈楽天王子〉に語りかけ、〈楽天王子〉から返事を得ていたのと同じ構図がある。さらに小説の終盤、勝呂医師が自殺をはかる直前に、「オー、ノン、ノン。そのこと駄目」、「わたくしはもむかし生きていた時疲れました。くたびれました。しかし、わたくしは最後まで生きてきましたです」と自殺を止めようと説得する声が聞こえ、誰何すると、「わたくしはガストンではない。わたくしは……イエス」（Ⅶ）と言う。寄り添い続けるガストンを通して、勝呂がイエスと繋がったことなるう。結局勝呂は「私は何も信じないし、あなたのことも信じではおらん」と言い、首つり自殺を決行してしまうが、そのそばに「一匹の犬」がまるで「死体の番をするように」、「哀しそうな眼で」発見した青年を見つめ、「（あんたには……この人の……哀しみがわかるか……）」と訴えているようだった（Ⅶ）と描かれている。孤独だった勝呂は最後に理解者を得て死んだことが示されている。これも「楽天大将」の金山が、志

乃という理解者を得て死んでいった構図と重なるのである。<sup>(16)</sup>

遠藤文学の中で特異な存在、〈説得する〉女性、朝吹志乃は、他者を信じることの大切さを語りかけ続けた。そして彼女を信じることを通して、一人の孤独な男を神と繋いだ。この志乃にはグレアム・グリーン作品の二人の女性、「内なる私」のエリザベスと「拳銃売ります」のアンが流れ込んでいると推察できる。が、「楽大将」は二作品の単なる模倣ではなく、心に寄り添い、語りかけを続け、神と人とを繋ぐ女性の登場は、「聖書物語」を中心とする、並行して執筆された作品と無縁ではない。志乃は、当時の遠藤の理想を背負う人物、読者にわかりやすく語りかける人物として慎重に造形されているのである。そしてその役割は、よりイエスのイメージに近い人物として再登場したガストンに受け継がれていったのである。

#### 注

- (1) 「河北新報」他(昭43・7・19、昭44・2・8、全203回連載。のちに昭44・12、講談社より刊行)。なお本文引用は講談社版に拠り、ルビは省略した。
- (2) 「十三章 彼は醜く威厳もなく」の、美津子の言葉「少なくとも奥さまは磯辺さんのなかに」「確かに転生していらっしゃいます」という「いたわり」には、磯辺の心を理解し寄り添う様と、玉ねぎは転生したとの大津の言葉を受けとめていることがうかがえる。
- (3) 「朝日新聞(夕刊)」(昭34・3・26、8・15、全142回連載。のちに昭34・10、中央公論社より刊行)。なお、本文引用は『遠藤周作文学全集』5(平11・9、新潮社)に拠り、ルビは省略した。
- (4) 笠井秋生「『おバカさん』論——遠藤周作のイエス像——」(『作品論 遠藤周作』平12・1、双文社出版)。

(5) 初出『カトリック作家の問題』(昭29・7、早川書房)の第五章として書き下ろし、のちに『遠藤周作文学全集』12(平12・4、新潮社)。なお、本文引用は全集に拠り、ルビは省略した。

(6) 「ブライトン・ロック」(Brighton Rock 1938)のピンキーとローズの関係も検討したが、①ピンキーはカトリック信者であり、場面場面で聖書の言葉が口をつけて出ている、②ローズはピンキーを心から愛し、彼にとって同郷の郷愁(辛い過去)を誘い、信仰を語り合える女性となっていくが〈受け入れる〉女性であり、〈説得する〉する女性ではない、③神に繋ぐという役割も弱い。以上三点から、対象外とした。

(7) 原題 *The Man Within* (1929)。引用は『グレアム・グリーン全集1 内なる私』(昭61・2、早川書房)による。ルビは省略し、章題表示は簡略化する(第一部第五章→一五)。

(8) 彼女が〈説得〉するのは、アンドルーズだけではない。アンドルーズが隠れて見ている前で、カリーオンにも、「話を聞かせて」と「あたたかい焰のように彼の心を動かす」声で語りかけ、アンドルーズの裏切りの疑いを聞き出す。そして恐れることなく「男が一人死んで、あなたの夢が破れたからといって、こんな大騒ぎをする必要があるのかしら?」と「問い詰め」(一四)る。さらに「おれたちを裏切った奴を、確かめ」「殺してやる」と言うカリーオンに、「そんなことして、何になるのかしら?」と問い、「何にもならない」「おれの使命なんだ」(一一四)となおも言う彼に、外国に逃げて、自分や他人を傷つけない方法を選ぶことを提案する。

(9) 「英文学研究」(梅光女学院大学英語英文学会 6号、昭45・11)。

(10) 「英文学」(早稲田大学英文学会 46号、昭52・3)。

(11) 『われらの文学10 福永武彦・遠藤周作』(昭42・1、講談社、のちに『遠藤周作文学全集』12、平12・4、新潮社所収)。

(12) 原題 *A Gun for Sale* (1936)。引用は『グレアム・グリーン全集5 拳銃

売ります』(昭55・9、早川書房)に拠る。ルビは適宜省略し、章題表示は簡略化する(第一章5↓1—5)。

- (13) 蛇足ながら付け加えておく。遠藤の「内なる私」「拳銃売ります」への関心が示された『カトリック作家の問題』『憐憫の罪 グレアム・グリーン(事件の核心)』の初出(昭29・7)と「楽天大将」の初出(昭43・7)には、十四年の開きがある。けれども、この間も遠藤はグレアム・グリーン作品に関心を持ち続けていた。「楽天大将」金山の言葉、「アフリカの奥地で癩病人のため修道女が一生懸命、看病していたことがある。ところが戦後に癩病の特効薬ができた」、その時「この修道女たち」は「悦ぶどころか、嘆いたってさ。自分たちが立派なことをする場所が、もう、これでなくなっただって……」(「逃避行」)は、グリーン作品「燃えつきた人間」(A Burnt-Out Case 1961)第一部第二章2のコラン医師と院長の会話の中に見られる。なお、この逸話は、「楽天大将」に五年先行する「雑木林の病棟」(初出「世界」昭38・10)にも用いられている。さらにグレアム・グリーンの名は、先に引用した「私の場合」(昭42・1)のほか、「悪魔についてのノート」(昭43・8)、「私と「テレーズ・デスケルウ」」(昭44・8)にも見える。昭和四十一年発表の「沈黙」における「権力と栄光」の受容については周知のとおりである。

(14) 「河北新報」(昭43・7・16付、朝刊)。

- (15) 「週刊新潮」(昭51・1・1号〜9・2号。のちに『悲しみの歌』と改題、昭52・1、新潮社より刊行)。なお、この作品は『海と毒薬』(昭33・4、文芸春秋新社)の続編として書かれたもので、「海と毒薬」では救いの得られなかった勝呂に、救いを与える意図がうかがえる。本文引用は『悲しみの歌』(昭56・6、新潮文庫)に拠り、ルビは省略した。

(16) 『深い河』(平5・6、講談社)に登場するガストンには神との対話はなく、自らが苦しみを分かち合う同伴者として力を尽くし、見ている者に「同じ

巡礼に同行するもう一人のお遍路さん」(十二章「転生」と認識される。彼の力を借りて安らかな死を迎えた塚田は、神に出会えたといえる。なお、三作品のガストンの変遷については、拙論「遠藤周作「おバカさん」論——ガストンはどこを歩いているのか——」(「学苑」79号、平15・1)を参照されたい。

#### 引用した以外の主な参考文献

- ・丸谷才一「追われる男・愛する女——グレアム・グリーンについて——」(「英語研究」41—11号、昭27・11)
- ・武藤久緒「グレアム・グリーンの小説に登場する女性たち——娯楽作品と初期作品を中心に——」(「実践英文学」24号、昭58・12)
- ・岩崎正也「グリーン創作技法」(「英語青年」137—6号、平3・9)
- ・岩崎正也「グレアム・グリーン『拳銃売ります』について」(「長野大学紀要」13—4号、平4・3)
- ・永島計次「Graham Greene論——初期3小説の展開——」(「久留米大学論叢」24—1号、昭50・6)
- ・加島祥造「あとがき」(『グレアム・グリーン全集5 拳銃売ります』昭55・9、早川書房)
- ・『グレアム・グリーン文学事典』(平16・9、彩流社)

(ふえき みか 日本語日本文学)